発行日　2016 年 6 月　No.49

JEA ニュース

心を一つにして福音の信仰のために力を合わせて戦い（ピリピ 1:27）

Japan Evangelical Association

4 月熊本地震で現地支援拠点となった熊本ハーベストチャーチの中村陽志牧師 (左から二人目) と
JEA 加盟支援団体関係者　P.8 に関連記事

日本宣教の新機軸を－ JCE6 への期待

祈りつつ準備が進められてきました第六回日本伝道会議（JCE6）まで、あと数ヵ月となりました。既に多くの方々が参加登録をしていてくださり、期待に胸が膨らんでまいります。

「再生への Re-VISION ～福音・世界・可能性～」がテーマです。日本の社会と教会の再生に向かって、私たちに与えられている豊かな賜物、働きの機会、協力態勢、宣教のビジョンを見直す絶好の機会です。私は、この JCE6 が日本宣教の新機軸を開くものとなることを期待しています。少し具体的に述べます。

第一に、宣教協力が地域ごとに目に見える形で進む大きなきっかけとなることを期待します。この JCE6 の特色は、開催地である神戸の諸教会が、「アナロギア」と言う協力のための体制を会議前に作って、会議後の地域的宣教協力の雛形を示していることです。アナロギアとは、JEA が 6 つの専門委員会によって具体的な課題について協力的な働きを進めていることに倣って、宣教、神学、社会貢献、女性、青年、援助協力などの分野で、神戸なりに作っている協力体制のことです。これが範例となって、他の地域でも同様な働きが進んでいくことが期待されます。このような協力体制が地方に拡散すれば、今迄どうしても首都圏での協力に留まりがちであった JEA が地方に根付いたものとなっていくことを意味します。また、JCE6 を越えた時点で、JEA 理事会が地域協力推進のための何らかの仕組みを考えてくださることを期待します。

第二に、JCE6 が「プロジェクト」ごとの宣教協力推進の契機となることを祈ります。7 年前の JCE5 の時に分野ごとの宣教協力を示す「プロジェクト」というアイデアが生まれました。JCE5 の後にそれが継続されたケースもありましたが、それが萎んでしまったケースも見受けられました。このたびの JCE6 では、青年伝道、家庭形成、マーケットプレイス伝道、ディアスポラ伝道など様々な分野での協力関係が丁寧に組み立てられ、2023 年の JCE7 に向かってのロードマップが作られています。JEA の理事会・専門委員会がそれらをバックアップする体制も作られつつあります。

竿代照夫
JCE6 実行委員長
イムマヌエル
中目黒教会牧師

第三に、地域ごと、分野ごとの宣教協力が教団同士の協力によって後押しされるような体制が整うことが期待されています。「宣教協力のインフラ作り」というプロジェクトがそれですが、これは、多くのプロジェクトの一つというよりも、全プロジェクトの要であると私は考えています。具体的には、各教団の指導者同士の連絡会が密に開かれることによって、地域ごと、分野ごとの宣教協力が励ましを受けるのです。

この新機軸は、一人でも多くの信徒・教職がたが伝道会議に出席してくださることによって可能となります。出席するだけではなく、「コイノニア・ディスカッション」という交わりを通して、主体的に語り合い、祈り合うことによって新機軸が開かれます。「福音の信仰のためにともに奮闘する」（ピリピ１：２７）仲間としての交わりを楽しみましょう。新しいビジョンに向かって心を合わせましょう。

皆様のご参加をお待ちします。ぜひＪＣＥ６の成功のために日々お祈りください。また、財的必要のためのご協力をもお願いいたします。

目次

日本宣教に新機軸を　1
日本宣教 200 年ﾌﾟﾛｼﾞｪｸﾄ ムスリムの隣人と生きる　2
流れのほとりで　3
戦時下の教会　4
若い奉仕者を育てる　5
聖書信仰の成熟のために　6
災害対応チャプレン研修 東日本大震災ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ　7
JEA アップデイト　8

日本宣教 170 ▶ 200 プロジェクト

JEA 宣教委員　福井 誠
日本バプテスト教会連合　玉川キリスト教会

JEA 宣教委員会では、日本伝道会議開催に向けて、東京基督教大学日本宣教リサーチの協力を得ながら、今回設けられた各プロジェクトが共通して使用できるデータブックを作成しようとしています。このデータブックは、これまでの日本宣教 170 年の歴史を振り返り、これからの 30 年を考えるための基礎データとしていくものです。

こうした資料集作りは大変な作業となるものですが、日本宣教リサーチの柴田初男氏が、中心となってその重責を担って、協力をいただいていることに感謝しております。現段階での内容は、①日本宣教 200 年の推移と展望、②日本社会と宣教、③都市と地方の問題、④在日外国人教会の実態、⑤海外日本人教会、日本人集会の実態、⑥放送伝道の実態、⑧震災と信仰調査という 8 項目による章立てになっており、2016 年 8 月に発行という段取りで準備を進めております。

そこで、具体的な内容ですが「日本宣教 200 年の推移と展望」においては、世界の宗教別人口、日本の宗教別人口と宗教意識、教勢データから見るクリスチャン人口の推移と現状、全国教団・教派別教勢といったものの客観的データを提示しており、日本の宣教が、どのように展開されてきたかを考察させられるものがあります。そして、改めて、教会そのものの在り方を問い直されていること、教会員数と礼拝者数との乖離現象があること、CS の衰退現象著しいことなど、に気づかされます。

「日本社会と伝道」では、少子高齢化社会の問題を始め、結婚年齢、地域貢献、環境問題、災害対応など、昨今の社会事情を振り返りながら、宣教の実践的な課題を考える内容が取り上げられています。また「地方と都市の伝道の状況、宣教協力」で興味深いのは若年女性（20-39 歳）人口の減少率から割り出した消滅可能性都市（市町村統廃合となる可能性のある都市）のデータです。こうした場所に位置する仏教寺院の問題は、すでにメディアでも取り上げられていますが、キリスト教会においても重要な課題です。

その他、在日外国人教会の実態、在日宣教師の実態、また在日外国人の分布や比率の現況など、昨今進む日本の多文化的な文脈を踏まえた宣教を考えさせられるデータ、海外日本人教会と日本人集会の実態、ユースミニストリーの実情、子どもが半減する市町村のデータ、ミッションスクールの現状、放送伝道の時間帯・地域帯の状況などの最新データが取り上げられています。

まだ、未編集の生原稿、生データを見ながら、ぜひこうした資料が活かされて、伝道会議において日本の宣教を突き動かす貴重な議論がなされることを願うものです。

宣教ｼﾝﾎﾟｼﾞｳﾑ「ムスリムの隣人と生きる」

JEA 総主事　品川謙一
日本キリスト合同教会　東浦和教会

昨年に引き続き、二回目の宣教シンポジウム・隣人シリーズとして「ムスリムの隣人と生きる」を 2016 年 2 月 20 日 (土)、お茶の水クリスチャンセンターで開催し、40 数名が集まりました。参加者は多様な顔ぶれで、ロシア正教の信徒の方もいらっしゃいました。

経済、ビジネスなどのグローバル化が進み、日本人がムスリムの人々と接する機会は確実に増えています。東南アジアのイスラム圏からの観光客・移住者増加で、ハラール認証された食品が店頭に並ぶようになり、祈祷所やモスクも増えています。そんな中で、日本人クリスチャンとしてムスリムの隣人たちとどのように関わっていくのかを考えました。

イスラム圏宣教師である A 師は、近年の状況としてイスラム回帰とクリスチャンに対する迫害の拡大が進む一方、聖書への関心の高まり、メディアや文書伝道、あるいは難民として逃れた地でのキリスト教系支援団体の働きなどを通して、受洗者が増加しているという傾向もあることを報告されました。

一般的にイスラム圏では、十字軍などの歴史的背景から欧米諸国に対する敵対心をもつ人々が多いですが、経済・文化面で交流を深めてきた日本についてはむしろ親近感を抱く人が多いと思います。日本に移り住んだムスリムたちも同様で、日本人クリスチャンが隣人として彼らに関わることは、欧米人ではないキリスト者に出会うという貴重な機会になります。

米国に住む Y さんは、イスラム圏での宣教準備のために学んでいた時、同じ町にモスクがあり、ムスリムたちが住んでいることを知ったそうです。そこでモスクの指導者に、クリスチャンとムスリムの和解のためにイスラム教、ムスリムについて学びたいと相談したところ、金曜礼拝や女性グループへの出席を認められ、交流が始まりました。

9.11 同時多発テロ後、ムスリムへの嫌悪感が高まった米国では、地域社会の分断や偏見も強く、米国育ちのムスリムにとっても Y さんが初めてのクリスチャンの友人という人が多かったそうです。子育てや日常生活の話をする中で、常に信仰の世界に生きているムスリムたちとは、他の米国の友人たちに比べて信仰の話がしやすいことに気づかされました。心がけたのは、「教える者ではなく、まず学ぶ者になる」ということ。「私が真理を握っているのではなく、真理なるキリストが私を握っている」という気持ちで、今目の前にいる彼らの必要、飢え渇きを知り、偽りのない心で愛することが大切だと学んでいます。イスラムの中には無条件の愛がないので、彼らの心に一番響くことは受肉したキリストの愛を経験することなのです。

韓国、日本などこれまでイスラムの影響力が少なかった地域の「イスラム化」を目指し、移民や学生として宣教師を送り込む動きも一方であり、その面での情報共有と対策も必要ですが、大多数のムスリムたちにとっては、日本人クリスチャンが隣人として関わることが、福音に心を開く入口になる可能性があります。まず日本の教会が正しくムスリムの隣人たちを知り、どのように愛し仕えられるかを祈り求めるところから始めていきたいと思います。

流れのほとりで

No.20

JEA 女性委員会担当理事　金本 悟
日本神の教会連盟　練馬教会

「共に生きる」ことを学びつつ

「死に至るまで忠実であれ。そうすれば、あなたに生命の冠を授けよう。」ヨハネの黙示録　２章 10 節ｂ

今年も「流れのほとりで」の時期です。この一年も、多くの信仰の友と語り合い、励まし合い、慰め合い、ビジョンを分かち合いました。幼子と、高齢者と、傷ついた方と、そして何かを成し遂げた満足感に満ちた方と「共に生きる」ことを経験しました。時には、「共に生きる」ことに失敗してしまいました。しかし、どのような時もイエス様は私たちと共に歩んでくださいます。

私はこれまで上記の御言葉から種々な語りかけを受けました。最初にこの御言葉を私に教えてくれたのは父でした。1942 年 12 月に父が小石川白山教会で受洗したとき、三田長老から記念にこの御言葉をいただいたそうです。戦争中の受洗ですので、死は身近で、死を覚悟することも必要だったのでしょう。

父から聞いた同教会女性宣教師であったミス・ローラ・モークの話を忘れることができません。第２次世界大戦が始まると、多くの米国人宣教師は帰国しましたが、ミス・モークは自分の身を守るより愛する日本に留まることを選ばれました。それで、敵国人であるので捕虜収容所に入れられました。収容所で「アメリカの爆弾が私の上に落ちればその分だけ日本人が助かる。*」と防空壕を飛び出し収容所所長の心を動かしたというエピソードがあります。（*「ミス・ローラ・モーク　その信仰と生涯」より）

上記の御言葉は私自身をも励まし続けています。特に、若かった頃自分の力でイエス様に従いたいと願い生命の冠をいただけるように頑張っていた時、私はこの御言葉から励ましを受けました。しかし最近、マリアの賛歌（ルカ１：46 ～ 55）を黙想した時「死に至るまで忠実」だったのはイエス様御自身であることに気づきました。すると、アブラハムの子孫たちはみな「死に至るまで忠実な人々」であったことに気づかされました。

男性も女性も、大人も幼子も、どんな人でも、神様の導きとイエス様のとりなしの祈りの中で、イエス様と共に歩むことが出来るようにと御霊に導かれていることに遅ればせながら気づかされました。

神様の導きという大きな「流れのほとりで」、今日も私が生かされていることに感謝します。また、多くの方々のとりなしの祈りに感謝します。「主よ！感謝します。」

いのちのパン

ＪＥＡ女性委員　藤田真木子
日本同盟基督教団　北総大地キリスト教会

祈祷会で「改革者の祈り」（新教出版社）を読み始めたのは、２０１１年２月でした。毎週、一つ読み、分かち合い、共に祈りました。

東日本大震災の余震の続く中では、カルヴァンの「私たちの虚栄と愚かさを認め、みことばに教えられますように」と祈りました。

遠い16世紀にプロテスタント信仰の基礎を築いた改革者たちの祈りは聖書に生きる信仰から沸いてくる祈りであり、その時代の課題に誠実に取り組む祈りでした。それは、時を経て今を生きる私の信仰を探り、気づかせ、兄弟姉妹と共に生き、祈ることを与えてくれました。

そして五年。２０１６年２月、最後の祝祷の項の中で「キリスト自身がわれわれの報いであります。」とのルターの祈りの言葉に出会いました。

再び、信仰の本質を示された思いでした。キリストご自身が父なる神から与えられた賜物であること。罪の中に死んでいたものが神によって生かされたこと。この何にも比べる事の出来ない賜物に感謝と望みを置く者として歩ませてくださいと心から祈りました。

「ことばに表せないほどの賜物のゆえに、神に感謝します。」
（Ⅱコリント９章15節）

戦前回帰の懸念は教会にこそ

『戦時下のキリスト教』（2015年教文館）をめぐって

JEA 社会委員　上中 栄
日本ホーリネス教団　鵠沼教会

1．なぜ歴史を振り返るのか

昨今の政治状況を反映してか、各方面での歴史を振り返る作業は、緊張感が増しています。この本もそうした取り組みの一つで、キリスト教史学会のシンポジウムを書籍化したものです。日本基督教団、カトリック、正教会、聖公会の研究者と、ホーリネスに属する筆者とで、宗教団体法を軸に戦時下の教会の姿を振り返りました。宗教団体法の問題点は、公権力の宗教統制・管理と、いわゆる神社非宗教論を法制化したことです。これを今日問う意味を考えたのですが、普段、交わる機会の少ない教派との共同の学びは、興味深いものでした。戦時下の教会の歩みを取り上げる意味と、教派を超えた日本の教会の課題について少し記したいと思います。

私たちが歴史を振り返るのは、昔を懐かしむためではなく、現在、危機に直面しているという自覚があるからです。それは、公権力の様相がナチスや戦前の日本に似ているという問題意識で、権力批判につながります。しかし、権力批判だけでは意味がありません。現政権がいろいろ批判されながらも、支持率は高く、選挙になれば政権与党が大勝するなど、戦前・戦時下と似た様相なのは、日本社会も同じだからです。そして、私たちキリスト者も例外ではありません。戦時下の教会の歩みは、しばしば批判の対象となりますが、今日の私たちにとって決して他人事ではないことを自覚する必要があります。

2．なぜ教会と社会の課題を分けるのか

日本の教会には、信仰と社会問題は別だという考えが根強くあります。現行憲法で「信教の自由」は保障されているので、権力の宗教統制はないと考える人は少なくありません。また、政治などにかかわると、かつての日本基督教団のように教会が混乱するという懸念や、心の拠り所を求める教会で政治の話は聞きたくないという思いが、社会問題を遠ざけているようです。

しかし、欧米において「信教の自由」は、勝ち取られてきたものです。本質的にプロテスタント教会は、権力から自由であろうとするのです。ところが日本の教会は、自由を勝ち取る戦いを経験していません。戦前の明治憲法では、「信教の自由」は天皇から賦与されたものでしたから、公権力が天皇制を後ろ盾にして、つまり宗教団体法によって教会に介入しようとした時、教会は抵抗できませんでした。戦後の現行憲法の「信教の自由」は、権力を縛るという立憲主義に基づくものですから、権力からの自由というプロテスタントの感覚に近いものがあります。それでも、これも日本の教会が勝ち取ったものとは言えません。ですから、なおさら権力との距離感は意識されるべきですが、残念ながら教会の関心は、反対の方向へ進もうとします。

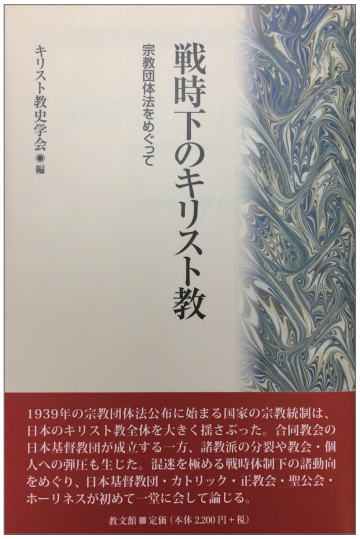
昨今の改憲論議は、立憲主義を軽視し、公権力が国民を管理しようとするものが主流です。当然、「信教の自由」の概念も変わります。自民党の改憲草案は、「信教の自由」を装いながら、実質的に神社非宗教論に道を開くものです。これは、権力に対して自由であろうとする教会にとって重大な挑戦ですが、当の教会がこの問題に無頓着であることは、オウンゴールで相手に得点を与えるようなものです。信仰と政治を分けて考える教会は、権力の暴走を止められず、自己保身のため偶像礼拝に陥ります。歴史が私たちに教えることです。

3．なぜ伝道の妨げになると思うのか

もう一点、教会が政治や天皇制に批判的なことを言うと、伝道ができないと言われます。ビジネスの世界では、政治と宗教の話題に触れないことが、暗黙のルールです。亀裂をもたらす話題を避けるためですが、教会が宣べ伝える福音は、決して耳当たりの良い言葉ばかりではないはずです。もちろん、無用な亀裂は必要ありませんが、罪と過ちについて言葉を濁すのは、福音を曲げることです。私たちは、言葉を尽くして罪の赦しを伝えるのです。そして罪と過ちは、決して個人の内面ばかりの問題ではありません。教会も罪を犯します。宗教団体法の庇護を求めた教会は、権力にすり寄りました。権力や日本社会からの逆風を感じると、信仰告白を貫くよりも、伝道のため、教会や信徒を守るためという大義で妥協を重ね、偶像礼拝に堕ちました。問われているのは福音理解です。

4．なぜ共同の学びが必要なのか

さて、このシンポジウムのように、かつての主流派・福音派という枠を超えた共同作業がなされているのは、意義深いことです。一方で、このような集まりに参加すると、教派間の微妙な関係を感じます。JEA 内にもあるものです。唯一の救いを信じながら、マイノリティに甘んじている日本の教会には、大勢志向が潜在しています。これが案外厄介なもので、時代や社会ばかりでなく、教会の自らの姿も見誤らせる作用があります。自分の姿は自分では見えません。共同の学びなどの交わりを通じて、私たちは自らを省み、神のみ心を共に選び取りたいと願います。



若い奉仕者を育てるために

NSDセミナー報告

JEA 青年委員　早坂 恭
日本福音自由教会協議会　東村山福音自由教会

開催日時：2016 年 2 月 26 日（月）17:00 ～ 19:00
会場：お茶の水クリスチャンセンター　アイリーンホール

【セミナー講演】

日本青年伝道会議（略称：NSD）の継続的働きとして行われている NSD セミナーですが、今回は「若い奉仕者を育てるために」というテーマで持たれました。日本における牧師の高齢化が進む中、若い献身者が十分に育てられなければ青年宣教も行き詰まります。青年たちが救われるだけに留まらず、彼らが教会にしっかりと居場所を持ち、主の教会に仕える喜びを持てるようになることがその鍵となっていくことでしょう。講師としてご奉仕させていただいた私が提言させていただいたことを幾つかご紹介します。

第一に、「理解なきところに信頼なし。信頼なきところに指導なし」という事です。人は根本的に自分のことをわかってくれない人に指導されたくありませんし、多感な若者たちはまず自身を理解し、受け入れてくれる人がいる所を居場所とするものです。広くきれいな部屋でなく、狭くて小汚い部屋であってもそこに自身を理解してくれる信仰の先輩がいることが何より大切なのです。

講演する早坂恭師

第二に、彼らのために奉仕の場をとにかく備えることです。簡単な事でもいいのです。小さな頃から神様のためにお役に立てる喜びを経験させてあげることが大切なのです。その際に失敗することを前提とし、彼らに失敗のスペースを与えることを忘れてはいけません。失敗から学ばせることなしに若者を奉仕者として育てることはできないでしょう。

第三に、身近な「良いモデル」が必要です。牧師や教会学校の教師たちが若者にとって身近な存在となっているでしょうか。近づきやすい柔和な者となり、あえて隙を作るぐらいが良いでしょう。「良いモデル」＝「立派なモデル」ではありません。聖書の正しい知識を言葉だけで教える人ではありません。むしろ弱く罪深い器であることを自身も謙遜に認めつつ、若者に寄り添い、聖書のみことばに生きている姿を見せられる人です。また、それは学校のような教室型の指導よりも、家族的な交わりの中で育てることが聖書的であり、効果的だと言えます。寝食を共にし、苦楽を共にし、神の恵みやビジョンを語り合う中で育てていくということです。

【パネリストによるコメント】

日本の半分ほどの教会に CS がない状況の中で、若い奉仕者を育てることは大きな課題であり困難と言えます。現在、牧師の平均年齢が 60 歳という状況にあり今後さらに奉仕者や後継者の獲得が大きな課題となると見込まれます。その現状を踏まえつつ今回のセミナーで早坂先生から「若者と関わる動機が大切であり、危機感ではなく愛が動機でなければならない」という言葉が印象的でした。私たちは厳しい現状を前にする時、相手の成長を促すよりも、自分の期待通りの奉仕者を作り上げてしまう危険性があると気づかされました。この学びを通して、神の御心に従う奉仕者の育成の大切さを教えられました。今後、各教会に新たな働き手が成長しさらに与えられることを祈り、期待します。

hi-b.a. 代表スタッフ　川口 竜太郎

セミナーに参加することで、私がいつも期待するのは、聖霊による新しいチャレンジを受けることです。今回、早坂先生の講演をお聞きして与えられたチャレンジは、若者たちともっと真剣に向き合うことでした。今、自分が遣わされている教会に神が送ってくださっている若者たちのために、もっと祈りたい、もっと関わりたいという願いが与えられました。どちらかと言えば、教会は教会内でマイノリティーである若者たちのために具体的にどう行動すればいいのか定まらずに、ここまで来たと思います。しかし、この時代だからこそ、教会を挙げて若者たちの救いと信仰成長のために多くの祈りを捧げることが重要だと感じています。

日本イエス・キリスト教団　宇都宮共同教会　山下大喜

今回セミナーで感じたことは参加者の意識の高さと期待でした。日本のキリスト教界が今ターニングポイントにあり、世代交代が望まれていることが伺えます。講師の早坂牧師による充実した講義はもちろん、hi-b.a. の川口師、また宇都宮共同教会の山下師からのレスポンスも大変刺激的で有益でした。多くの学びの機会が私たちには与えられますが、大切なことはそう多くはありません。若者伝道をすると言ったときに、早坂先生は私たちに動機を問い、祈りと愛の必要性を改めて訴えられました。答えは難しいようで、実は簡単なのだと思います。参加者一人ひとりが新たなチャレンジを受けたセミナーであったと感謝します。

パネリスト諸師と早坂師

東京フリー・メソジスト教団　桜ヶ丘キリスト教会　飯田 岳

「聖書信仰の成熟を求めて」書籍紹介

JEA 神学委員会　山田 泉
ウェスレアン・ホーリネス神学校

2014 年から神学委員会にオブザーバーとして参加させていただくようになりました。その頃の委員会の話題は、原発に関する福音派からの提言を発表するという課題に向けてのものでした。神学委員会を構成しておられる先生方は、偶然のようですが、それぞれの専門分野がうまく配在されていて、歴史、科学、牧会、神学、海外の視点などの各面から論ぜられ、ブックレットとして出版された『原発と私たちの責任～福音主義の立場から』は、内容の幅広さ、豊かさにおいて大変興味深いものでした。

当時、数回の委員会にわたって先生お一人お一人から、その論文の原稿が発表される場に同席させていただきながら、「福音派の視点」あるいは「福音主義の立場」ということを、私は事改まって意識しつつ物事を見る・考える、ということをしていなかったことに気づかされました。そしてその理由として二つの理由に思い至りました。一つは、私は生まれも育ちも福音派の人間であって、ある意味自分の視点は信仰世界の当たり前、事によっては絶対なものであるという、根拠のない自信と狭い世界観による認識不足であったこと。いま一つは、福音派であるとは何か、福音主義とは何か、という根本的事柄を詰めるという課題を与えられてこなかったこと（受け身であってはいけないのですが…）です。

2016 年 9 月に神戸で開催されます第 6 回日本伝道会議 (JCE6) において神学委員会のなすべきことが、ここ最近の委員会の話題です。神学委員会が取り組むテーマとしてあげていることは「聖書信仰の成熟を求めて」です。聖書をどうとらえているのか、という古くて新しい問題とともに、確かな聖書信仰と真の福音理解の今日的・将来的な再構築を目指すものとお聞きしています。福音派において、その範囲の整理と、社会に影響を与える働きを担う教会であるためにも、大変重要なことと思います。

この課題にあたって私が手にした本の一つは、宇田進氏著『福音主義キリスト教とは何か』（1984 年いのちのことば社）です。福音派のルーツ、その特徴的な性質を知り、自分の意識はそこに近いことを確認しました。また多くのデータを通して福音派教会が教会成長の牽引力となり、社会にインパクトを与えたことも再確認しました。かたくなに自分たちが立つところを強調する福音派は、対峙するものを持ちつつも、やはり私は、神の力を著しく働かせる健全な信仰母体のようなものを感じながら、福音主義を見つめたように思いました。

西ドイツ出身ルター派神学者であり、牧師である H・ティーリケ氏が北米大陸で数多くの大学と教会とで行われた対話形式の講義を記録した『現代キリスト教入門～福音的信仰の核心』（1972 年ヨルダン社）からは、福音派信仰もつ者たちの傾向・課題を突きつけられました。それは先に申し上げました、私自身のように福音派陣営に生まれ育った者が当たり前としてきた思考回路への警告であり、その思考がもたらす影響範囲を知る手がかりを見るように導かれたと思います。ティーリケが扱ったテーマは全 11 項目からなりますが、その中のいくつかを紹介します。

「聖書は神の言葉であるか～逐語霊感説の問題をめぐって」、「聖書を理解するための特別な方法は存在するか～解釈学の本質と意義・神学教授たちとの対話」、「私たちは『処女降誕』を信じなければならないか～教理の拘束性について・奇跡の意義・真の信仰と偽りの信仰」、「人種差別撤廃に関するキリスト教的立場はあるか～教会の政治参加の問題」、「どのようにしてドイツは国家社会主義に席巻されたか～ナチ支配下のドイツについて」。

たとえば『処女降誕』の項では、「処女降誕」信仰についての論点は、自分がどこに立っているのかの主張とその固持、そして反対の立場に対する論駁への言及ではない、と切り出します。まず論点の土俵として、「教理的語句をすべて平等に取り扱うべきであるか。その場合、それぞれが平等な位置を保って関わり合うものとみなされねばならない。それとも、そこにはいわゆる＜地位の相違＞といったものが存在するか」と論点課題を出し、ファンダメンタリスト的立場の思考傾向を探ります。どちらの立場が正統であるかということではなく、その立場に至った経緯に注目を向けさせます。「信仰の服従とは、私たちが、教会の信仰的遺産を、教会のより高い権威の故に、単純に受けとることには存しない。信仰的信頼とは、あの神のみわざ（またはそれに関する告知）が、私に透明なものとなり、その結果、私のために鼓動する心臓（ハート）のシグナルとして、私がそれを受けとる時、はじめて生まれるのです。…私たちは信仰の単なる証人であるだけでなく、信頼される証人でなければなりません。…（そのためには）私たちはキリスト教の受け売り役を演じ、それを形式的に証人したりすべきではありません。そうではなく、自ら苦しみ、経験した後、自分のものにした真理を、人々に告げ知らさねばならない」と語り、結論の相違が論争の必然であるべきか、と不覚ポイントへの注意を向けさせます。

藤本満氏著『聖書信仰』（2015 年いのちのことば社）は、福音主義の歴史、発展、変遷経緯の整理しながら自分を探ることに非常に大きな助けをくださいました。私の受容量を超えてしまい、混乱をきたしてしまったところで、「水槽は小さいのだろうか」との問いかけに触れて、立ち止まり、方向設定をすることへと導かれました。教会の信仰的遺産をただ単純に受けとる証者ではなく、鼓動するハートのシグナルを確認できる証者であることを願いつつ。

災害対応チャプレン研修会

JEA 援助協力委員　郷津 裕
日本同盟基督教団　日立福音キリスト教会

DRCnet 災害対応チャプレン委員会主催の「災害対応チャプレン養成コース第２回研修・寄り添い続けるために」が 2016 年２月１日～３日、サンシティ市川 (千葉県) で 50 名の出席を得て、開催されました。講師は、石川一由紀師（救世軍）、岩上敬人師（イムマヌエル聖宣神学院）、ヒューレット・ジョン師（川ミニストリー）、吉川直美師（聖契神学校）、郭ヘレン師（クラッシュ・ジャパン）でした。

前回（2013 年）、米国救世軍ケビン・エラーズ師によるトレーニングセミナーから３年が経過し、日本の文化、土壌に合った心のケアとスピリチュアルケアをめざして、これまでの経験を活かし準備された３日に渡る研修となりました。

セッション１、２では、災害対応チャプレンの役割・使命は、安心と慰めを与える者として被災者の立場に立って寄り添い、互いにつながることにより、その存在を通して仕え、相手をキリストにつなげることにあることを確認しました。特に、今回の研修では被災地支援の経験を踏まえて①自分自身にある神から与えられている回復力（レジリエンス）を新たに見出し、また被災者の方々の中にもある回復力を見出すようにサポートすること、②支援活動を継続するために、セルフケアとしてディブリーフィング（支援活動の状況報告、そこで経験した事実確認）を通して気付かない自分の感情の動きを整理し区切りをつけて次の支援ステップに進むこと、③自分自身を知るためのワークショップ＜ディブリーフィングの学びと実践、コラージュ作成による自己の内面分析の実践、自己分析ツールの実践（求められる要求と自らのリソースを分析し、自分の情緒バランスを取る）＞などの研修内容を通して、支援者自身のセルフケアの大切さを重点的に学ぶ機会が与えられました。

石川一由紀師

また被災地での具体的な支援活動報告の時も持たれました。最後に研修出席者全員に修了証が発行され、災害対応チャプレンとして今後も活動することを互いに確認し合いました。近い将来広域災害が必ず起きることが予測される中で、災害対応チャプレン養成は各教団・教会において急務であることを改めて実感した研修でした。

第4回東日本大震災国際神学シンポジウム

JEA 援助協力委員　村上正道
日本福音キリスト教会連合　湘南のぞみキリスト教会

第４回東日本大震災国際神学シンポジウムが、2016 年２月 29 日、３月１日の二日間、お茶の水クリスチャンセンターで開催されました。

今年のテーマは「キリストさんと呼ばれて～この時代、この地でキリスト者であること（Re-visiting Christian identity in Post-disaster Japan）」でした。吉田隆師（神戸改革派神学校校長）は、「キリストさん」とは、被災者の方々の口から出た表現であり、震災前の日本において私たちが持っていた「キリスト者像」を問い直し、これからのあり方を再発見する手がかりになる言葉ではないかと語られました。

吉田師はまず「キリスト者」という言葉を聖書的、歴史的に掘り下げた後、ローザンヌ誓約 (1974 年) のキリスト者の社会的責任は「われわれの神観、人間観、隣人愛の教理、イエス・キリストへの従順から当然のこととして帰結する」との言葉にふれ、「そのように私たちが人々に真摯に向き合い、その痛みや苦しみに心を寄せ、語る前にまず耳を傾け、その問題の重さや深さに返す言葉もなく、ただ祈るしかできない自分の無力を嘆き、共に泣き、それでもともに生きていこうとする時、実は私ではなく、私の中にある神の愛が、その深い恵みが姿を現してくるのではないでしょうか。」と結びました。

ウィルバート・シェンク師 (フラー神学大学院) は、今回のテーマは震災後の日本の文脈でクリスチャン・アイデンティティを再考することだと位置づけ、クリスチャン・アイデンティティの実践に目を向けました。そして 16 世紀宗教改革で迫害された仏ユグノー派が、山上の垂訓・良きサマリア人の喩えから学び、ナチス占領下でユダヤ人難民を助けた史実などから、実践は効果的に行われる時に神の恵みに参与することを助けると語られました。聖霊によって生きている教会は、実践により具体的にそのことを現し、他者に影響を与えます。実践は長い歴史に試されてきたので重要であり、災害や迫害が起きた時に「キリストのように」生きる者とする備えとなるのです。

午後のパネルディスカッションでは、被災地で「線香の一本でもあげていけ」と言われたことをテーマに、米内宏明師 (バプテスト教会連合理事長) の発題に、小田武彦師 (カトリック大阪教区司祭、日本宣教学会理事長)、加藤誠師 (バプテスト連盟前常務理事)、野田沢師 (学生キリスト友愛会主事) がそれぞれ応答する形でディスカッションが行われました。分科会では、カトリック、日本基督教団、日本福音同盟、日本ペンテコステネットワーク、諸地域ネットワークによる震災５年を迎えての提言と、東京基督教大学・日本宣教リサーチによる「震災と信仰」調査の報告が分かち合われました。

パネルディスカッション

JEA アップデイト

WEA･ILF でビジョンを語るテンデロ WEA 総主事

WEA･ILF 参加のアジア福音同盟リーダーたち

国境近くで朝鮮半島の平和のために祈る ILF 参加者

全壊した熊本東聖書キリスト教会と豊世牧師ご夫妻

中村陽志師を迎えての熊本支援首都圏連絡会

■ WEA(世界福音同盟) 国際リーダーシップフォーラム (ILF) 報告

2016 年 2 月 29 日～ 3 月 5 日、韓国ソウル市で WEA 国際リーダーシップ (ILF) が 40 ヵ国から約 90 名を集めて開催され、日本からは品川謙一総主事が参加しました。

「福音にあるパートナー：神の教会を建てる」のテーマのもと、WEA 加盟の各地域・国の福音同盟と WEA 専門委員会、タスクフォース、パートナー組織などの協力・連携のあり方をめぐって活発な話し合いが行われました。WEA には宣教、神学、信教の自由、女性、青年、IT の 6 つの専門委員会、国連連携、人身取引、難民、核兵器、被造物ケア、ファミリーミニストリーなど分野ごとのタスクフォースがあります。

これらのミニストリーがもつ情報、人的資源、ネットワークが WEA メンバーである各国福音同盟とその傘下にある地域教会と有機的につながり、各地域の草の根レベルの宣教の前進に貢献していくように、今回の ILF では、いくつかの戦略的課題に関するワーキンググループでの話し合いがもたれました (聖書エンゲージメント、伝道・弟子作り・健康な教会、教会における女性、迫害へのキリスト的応答、宗派間・宗教間関係など)。

これはまさに JCE6 のプロジェクトで取り組もうとしていることに重なる課題で、グローバルな宣教ミニストリーのもつ資源を宣教の最前線である地域教会 (ローカル) レベルで実を結ぶ働きにつなげていくためには、従来の組織ベースではなくタスクベースの協力を促進していくことが有効だと思われます。集会のもち方も JCE6 同様テーブルグループでディスカッションを重ねる方式でした。

会期中、アジア福音同盟 (AEA) のリーダー会議も行われ、今年 8 月 29 日～ 9 月 1 日、インドネシアで開催予定の AEA アジア宣教会議・総会の準備について話し合いました。アジア地区におけるファミリーミニストリーの重要性が討議され、ファミリーミニストリーを AEA の主要な働きの一つに位置づけることを決めました。

また会議三日目には、北朝鮮国境の板門店を訪問し、朝鮮半島分断の歴史と現実を肌で感じ、朝鮮半島の平和と統一のために共に祈る時をもちました。

■熊本・大分地震への対応と支援の継続

4 月 14 日夜に発生した熊本地震は、16 日未明の「本震」を経て熊本、大分にまたがる広範囲な地域で、震度 7 二回を含む 1,500 回以上 (5/26 現在) の地震が観測される事態となっています。キリスト教会関係では、益城町の熊本東聖書キリスト教会が倒壊し、閉じ込められた豊世武士牧師の娘さんがレスキュー隊に救助されました。

地震直後から熊本教役者会を中心に立ち上げられた地域教会ネットワークによる救援活動が開始され、熊本ハーベストチャーチ (中村陽志牧師) を拠点として、国際飢餓対策機構やワールドビジョン、クラッシュジャパン、救世軍などと連携した働きが行われています。さらに福岡の日本イエス・キリスト教団油山シャロームチャペル (横田法路牧師) を中心に周辺各県の教会による超教派の「九州キリスト災害支援センター」が 4 月 18 日に立ち上げられ、熊本の諸教会を地域全体で支える枠組みができました。

JEA 援助協力委員会は 4 月 16 日から支援金募集の呼びかけを開始し、「教会から教会へ、教会を通して」の支援理念に沿って、九州キリスト災害支援センターへのサポートを中心にこの働きを支援しています。4 月 25 日には JEA 理事会内に熊本地震対策室 (中台孝雄理事長を室長とする) を設置し、援助協力委員会の働きをよりスムーズに進める態勢を整えました。

相次ぐ余震で瓦が落ちたり屋根や壁に亀裂が入るなどの建物被害によって礼拝が困難となった教会もあります。また、揺れが続くことで精神的に不安定になる子どもたちも多く、今後も継続した支援が必要とされています。支援に関する情報は JEA ウェブサイト (http://jeanet.org/) をご覧ください。

JEA 総務局から

◆いつも JEA の働きのためにお祈りとご協力をありがとうございます。昨年リニューアルした JEA ウェブサイト (http://jeanet.org/) は、スマートフォンなどの携帯端末からも見やすいデザインになっており、ソーシャルメディアのシェアボタンも設置していますので、皆さんのネットワークや情報共有にご活用ください。

◆ JEA 総務局は、7 月に OCC ビル内で別の部屋に移転予定ですが、電話番号、メールアドレスなどの連絡先情報は変わりません。住所も「OCC 内」で統一すればそのままで結構です。もし部屋番号が入っている場合は「OCC 内」としてください。

日本福音同盟

心を一つにして福音の信仰のために力を合わせて戦い（ピリピ 1:27）

JEA ニュース 49 号　　発行・日本福音同盟 (JEA)
発行者・中台孝雄　　編集者・品川謙一
〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台 2-1 OCC 内
TEL : 03-3295-1765　　FAX : 03-3295-1933
email : adminoffice@jeanet.org